能

隅田川（すみだがわ）テキスト（詞章）大解剖

この言葉が聴き取れれば絶対、面白い！

撮影：吉越研

うららかな春の日、連れ去られたわが子を探して都から隅田川へ―。救いようのない現実を詩的に描いた作品

舞台芸術研究センター特別教授で能楽研究者の天野文雄が、テキストのここが聴きとれると面白い！というポイントを大解剖。能を初めてご覧になる方もこれを読めば、きっと親近感がわくはずです。

天野文雄
京都芸術大学
舞台芸術研究センター 特別教授

『隅田川』のストーリーは現実的な肌触りが強く、能では珍しく救いのないお話です。非常に分かりやすい展開なので、能を初めてみる方も、きっと心にぐっとくるものがあると思います。

あらすじ

人買いに息子を連れさられた都北白川（春秋座のある辺り）に住む母親が物狂いとなりながら、わが子を探して、東国武蔵の隅田川へたどりつくところから話が始まります。渡し舟で下総（千葉県）に向かう舟中、対岸で何か催されているのに気づいた母親が船頭に尋ねると、あれは一年前に亡くなった十二歳の少年を弔う大念仏で、その子の名は梅若丸だと教えられます。その梅若丸こそ探しているわが子。墓に向かうと中から梅若丸の亡霊が現われますが、それもつかの間、姿は消え、後には明け方の茅原の原が広がるばかりでした。

ここが聴きどころ 1

これはラップ？ センス溢れる掛詞が随所に

ワキヅレ　末も東の旅衣、末も東の旅衣、日も遥々の心かな

冒頭シーンで都から来た旅人が言うセリフです。着物の裾（すそ）のことを褄（つま）といいますが、東（あづま）の「つま」という音に着物の褄という意味も持たせ、さらに着物ということで「旅衣」に続けた「掛詞（かけことば）」です。掛詞とはひとつの言葉にふたつの意味を持たせることで情趣を倍増させる手法で、ラップでいえばダブルミーニングでしょうか。この他、能には縁語なども、ちりばめられているので、そんな点に注目して鑑賞するのも良いと思います。

ここが聴きどころ 2

子を思う切ない母心を古典文学を用いて表現

地　もとよりも、契り仮なる一つ世の、契り仮なる一つ世の、そのうちをだに添ひもせで、ここやかしこに親と子の、四鳥の別れこれなれや、尋ぬる心の果てやらん――

人買いに連れ去られたわが子を訪ね、やっとの思いで都から隅田川にたどり着いた母親。川辺に立ち、わが子を思う母の心情を吐露する場面です。地謡（じうたい＝コーラス）が担当していますが、母のセリフです。

「一つ世」とは現世のことです。親子の縁はこの世だけのものだというのです。その少しの間も一緒にいられないという嘆きです。「四鳥（しちょう）の別れ」とは古代中国の文献にみえる言葉で、幼い鳥が成長し四方に分かれて飛び立つ時、母鳥が悲しんで鳴くという親子の別れのこと。「四鳥の別れ」というのは、まさにこのことだというのです。

母親の悲痛な心の叫びが中国の故事を引用して表現されています。

ウラ面へ

ここが聴きどころ 3

『伊勢物語』をふまえたしゃれた展開

ワキ　たとひ都の人なりとも、面白う狂へ、狂はずは舟には乗すまじいにて候

シテ　うたてやな隅田川の渡守ならば、日も暮れぬ、舟に乗れとこそ承はるべけれ、かたのごとくも都の者を、舟に乗るなと承はるは、隅田川の渡守とも、覚えぬ事な宣ひそよ

ワキ　狂女なれども都の人とて、名にし負ひたる優しさよ

シテ　のうその言葉は、こなたも耳にとまるものを、かの業平もこの渡りにて、名にしおはば、いざ言問はん都鳥、我が思ふ人はありやなしやと、のう舟人、あれに白き鳥の見えたるは、都にては見なれぬ鳥なり、あれをば何と申し候ふぞ

ワキ　あれこそ沖の鴎候ふよ

シテ　うたてやな浦にては千鳥ともいへ鴎とも言へ、などこの隅田川にて白き鳥をば、都鳥とは答へ給はぬ

ワキ　げにげに誤り申したり、名所には住めども心なくて、都鳥とは答へ申さで

シテ　沖の鴎と夕波の

ワキ　昔に帰る業平も

シテ　ありやなしやと言問ひしも

ワキ　都に人を思ひ妻

シテ　わらはも東に思ひ子の、行方を問ふは同じ心の

ワキ　妻を忍び

シテ　子を尋ぬるも

ワキ　思ひは同じ

シテ　恋路なれば

ここは渡し場に到着した母親が渡守（船頭）に乗せてほしいと頼むと、「何か芸を披露したら乗せてやろう」と言われるところで、有名な『伊勢物語』の「東下り」のエピソードを盛り込んだ風雅な場面です。『伊勢物語』の主人公（当時は在原業平と考えられていました）も渡し舟で下総へと渡るのですが、そのシーンをもじって母と渡守がハイセンスなやり取りをしていきます。

渡守「舟に乗りたいのなら芸を披露せよ」。母「何をおっしゃいます。隅田川の渡守なら、日も暮れてきたから舟に乗れというべきです。そんな無粋なことをおっしゃるとは、隅田川の渡守とも思えません」。渡守「これはごもっとも。さすが都人で、〝名にし負う〟風雅な心を持っている」。母「その〝名にし負う〟も聞き捨てならぬ言葉です。あの業平もこの渡し場で〝名にし負はばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと〟と詠んでいますから。船頭さん、あそこに白い鳥が見えますが都では見慣れない鳥です。あれは何という鳥ですか」。渡守「あれは沖のカモメだ」。母「なにをおっしゃいます。ここが海辺なら千鳥ともカモメとも言ってよいでしょうが、この隅田川で白い鳥といえば都鳥です。どうして都鳥とお答えにならないのですか」。渡守「なるほど、言われる通りだ。名所に住んではいますが、風雅を解する心がないので都鳥と答えずに」。母「沖のカモメだなどと答えたのですね」。渡守「業平もここで」。母親「ありやなしや（無事でいるのかどうか）と尋ねたのです」。渡守「業平は都の妻を思い」。母「私は子の行方を尋ね」。渡守「業平は妻をしのび」。母「私は子をたずねている」。渡守「どちらも思いは同じ」。母「人を恋うるという点では同じです」。

当時『伊勢物語』は非常にポピュラーな古典でした。ちなみに都鳥とはユリカモメのこと。現在、東京都民の鳥はユリカモメですね。

ここが聴きどころ 4

「死の縁」という死生感
――生所を去って東の果ての

シテ　今まではさりとも逢はんを頼みにこそ、知らぬ東に下りたるに、今はこの世に亡き跡の、標（しるべ）ばかりを見る事よ、さても無残や死の縁とて、生所を去つて東の果ての、道のほとりの土となりて、春の草のみ生ひ茂りたる、この下にこそあるらめや

舟中で対岸を見ると大念仏が行われています。母親が渡守にあれは何かと問うと「一年前、ここで亡くなった少年、梅若丸の供養だ」と答えます。その梅若丸こそわが子。その墓を見て「今まではひょっとしたら逢えるかもと期待をして見知らぬ東国に来たけれど、わが子の墓標を見ることになってしまった。それにしても不憫なこと〝人はどこで死ぬかわからないもの〟と言われるように、生まれ育った地から離れた東の果てで路傍の土となり、春の草だけが生い茂るこの下に眠っているのですね」と嘆くのです。

ここに出てくる「死の縁」とは仏教の「死の縁無量なり」という言葉からきています。人はどこでどのような死に方をするかは分からないという意味です。この後、母親も大念仏の輪に加わると墓の中から亡霊の梅若丸が「母上ですか」と現われ、母はその手を取ろうとしますが、子の姿はすぐに見えなくなります。子と見えたのは塚の草で、あたりは茫々たる茅原（かやはら）が広がっているばかりでした。

演出をめぐる親子の論争

『隅田川』の作者は世阿弥の嫡男・元雅です。「梅若丸は母の幻覚だから出す必要はない」と言う父に対し、元雅が「それではこの能は成り立たない」と反論した「隅田川子方論争」がよく知られています。その後の上演史は元雅の主張に正当性を認めているようですが、実際にご覧になったみなさんは、どうお考えになるでしょうか。

撮影：駒井壮介

渡邊守章記念
春秋座―能と狂言
二〇二三年二月四日（土）一四時　会場：春秋座
狂言『花盗人』　野村万作、野村萬斎 ほか
能『隅田川』　観世銕之丞 ほか
詳しい情報は劇場ＨＰをご覧ください。